【報告】石井鶴三宛田原幸三書簡について

大　島　賢　一　（信州大学学術研究院教育学系）

１．はじめに

本稿では、信州大学所蔵石井鶴三関連資料中の、田原幸三(1911-2000)差出し書簡についての調査報告を行う。田原は、長野師範学校、信州大学教育学部で美術教師の養成に携わり、また、昭和22年に発足する、長野県全県規模の美術教員の研究組織である長野県美術教育研究会の設立に尽力し、その4代目会長(昭和33～35年)を務めるなど、戦前から戦後にかけて、長野県の美術教育、美術教師たちへ大きな影響力を有していた人物である。

信州大学所蔵石井鶴三関係資料には、2020年11月現在までに、石井宛ての18通と、石井の死後、遺族の石井蹊子に当てた1通の田原を差出人とする書簡、計19通が確認されている。今回、田原のご遺族よりご承諾を得られたため、これら書簡とその翻刻について公開する。合わせて、田原幸三についてそのプロフィルを紹介し、本書簡についての解説を加える。

２．田原幸三について

まず、田原の略歴をまとめる[1]。

明治44(1911)年	長野市川中島町に生まれる(3月25日)
昭和 5(1930)年	長野県師範学校卒業
昭和 6(1931)年	長野県師範学校専攻科卒業
	長野県下高井郡野沢尋常高等小学校訓導
昭和 7(1932)年	師範学校中学校高等女学校手工教員免許を取得
昭和 8(1933)年	長野県師範学校附属小学校訓導
	長野彫塑講習会に参加　石井鶴三の指導を受ける
昭和 9(1934)年	師範学校中学校高等女学校図画教員免許を取得
	須坂版画講習会に参加　平塚運一の指導を受ける
	信濃創作版画協会に参加
昭和12(1937)年	長野市図画研究会による長野絵画講習会に参加　石井鶴三の指導を受ける
昭和15(1940)年	東京高等師範学校研究科(図画)卒業
	島根県女子師範学校　教官
昭和19(1944)年	長野師範学校　教官
昭和21(1946)年	長野美術研究会設立　戦時中途絶えていた長野市絵画講習会を再開する

昭和22(1947)年　長野県視学となる
　　　　　　　　長野県美術教育研究会の設立に関わる
昭和23(1948)年　長野西高等学校教諭
昭和24(1949)年　長野県教育委員会指導主事
昭和25(1950)年　信州大学　長野師範学校 教官　11月より信州大学　教育学部助教授を兼任
昭和26(1951)年　信州大学　教育学部　助教授(彫刻担当)(昭和42(1967)年より教授)
昭和33(1958)年　長野県美術教育研究会　第4代会長となる(昭和35(1960)年まで)
昭和51(1976)年　信州大学　教育学部　定年退官
平成12(2000)年　死去

昭和6年に長野県師範学校を卒業した田原は、野沢尋常高等小学校の訓導として教師生活を始める。昭和8年度から昭和13年度までの6年間は、長野師範学校附属小学校で図画手工科の専科教員を務める。その間、文部省師範学校中等学校高等女学校教員検定試験、いわゆる文検を受験し、昭和7年に手工科、昭和9年に図画科に合格しているようである。ちなみに、文検は合格者1割程度の難関試験であり、昭和7年の「手工」については、130名の出願者に対して合格者18名[2]、昭和9年の「図画(西洋画,容器画)」については出願者302名に対して合格者34名[3]であったことが確認できる。中等学校での図画、手工の教授資格を得た田原は、昭和14年度、東京高等師範学校の研究科に学び、昭和15年、卒業とともに、島根県女子師範学校の教官となっている。昭和19年には出身校である長野師範学校の教官となる。昭和23年、学制改革によって新設された長野西高等学校(長野高等女学校を前身とた女子高等学校)に転出したが、昭和25年には、信州大学に包括設置された長野師範学校[4]の教官に戻っている。同年11月より信州大学教育学部助教授兼務となり、師範学校が閉校となった昭和26年以降、定年退官まで、信州大学教育学部にて、教員の養成に従事している。田原は、戦前から戦後にかけて、初等、中等、高等教育機関での教授経験を有する美術教師であった。さらに、県内唯一の美術科教員養成機関の教授を務め、また、指導主事も務めているなど、長野県の美術教育界における指導的立場にあった。

３．田原幸三差し出し書簡

信州大学所蔵石井鶴三関係資料中、田原を差出人とする書簡については、表１の通りである。この19通のうち、[書12-59]の仮番号の付されたものは、石井没後の昭和51年に出された田原の信州大学退官の挨拶状で、石井の遺族である石井蹊子を宛先としている。

これらの書簡には、長野絵画講習会に関わる連絡状(仮番号[書2-115][書4-511][書5-56][書10-444][書13-1198][馬場51-230][馬場51-270][馬場53-251])8通と、版画による年賀状(仮番号[書4-509][書4-512][書4-513][書4-514][書4-515][書4-516][書6-388][書10-449])8通が含まれる。その他3通は、先程の退官の挨拶状の他、石井からの手紙に返信する内容のものとなっている。

表１．田原幸三差し出し書簡

仮番号	制作日	形式	備考
書 2-115	昭和33年6月23日	便箋4枚	絵画講習会開催の連絡状
書 4-509		葉書	年賀状(昭和40年)
書 4-510	昭和41年7月7日	葉書	『婦人の友』送付についての礼状
書 4-511	昭和31年4月10日	葉書	町田則義持参作品について
書 4-512		葉書	年賀状(昭和44年)
書 4-513		葉書	年賀状(昭和43年)
書 4-514		葉書	年賀状(昭和48年)
書 4-515		葉書	年賀状(昭和47年)
書 4-516		葉書	年賀状(昭和46年)
書 5-56	昭和41年5月10日	便箋5枚	石井鶴三先生絵画講習会三十周年記念展覧会について
書 6-388		葉書	年賀状(昭和32年)
書10-444	昭和29年7月6日	便箋6枚	絵画講習会開催連絡
書10-449		葉書	年賀状(昭和34年)
書12-59	昭和51年5月	葉書	信州大学退官挨拶／石井蹊子宛
書13-1196	昭和36年5月27日	便箋6枚	手紙への返信／身辺雑記
書13-1198	昭和36年7月11日	便箋3枚	絵画講習会の実施計画
馬場51-230	昭和27年6月29日	便箋4枚	絵画講習会指導依頼
馬場51-270	昭和32年8月13日	便箋4枚	講習会御礼
馬場53-251	昭和35年3月17日	便箋5枚	松橋直人遺作展及び第二回試作展への出陳依頼／絵画講習会への中川一政への講師依頼確認

４．石井鶴三による長野市での彫塑講習会と絵画講習会

まず、絵画講習会に関わる連絡状について検討を加える。

最初に、昭和期に石井を講師として長野市内で開催された二つの教員向け美術講習会、すなわち長野彫塑講習会と長野絵画講習会について説明する。

長野彫塑講習会は、昭和8年から10年の3年間開催が記録されている。当時の長野県では、すでに大正13年から、上田において、石井による彫塑講習会が開催されていた。長野市での講習会の開催については、当時柳町尋常小学校の校長だった小原福治(1883-1965)の関わりがある。小原は昭和7年、自由学園を参観する。その日は偶々「芸術の日」に重なり、当時、自由学園の美術教師を務めていた石井と出会い、翌年柳町小学校を会場として長野において石井の彫塑講習会を開催するきっかけとなったと回顧している[5]。小原自身は自由学園で石井に対峙するまで「未見参であるが然しお名前は知っている」[6]という程度であったようだ。一方で、長野の美術教師数名が昭和7年の上田彫塑講習会に願い出て参加しているという記録がある。長野の講習会の実質的な運営にあたった当時長野県師範学校教諭の宮坂彦一も、昭和7年の上田の講習会に参加していたことが、信州大学所蔵資料中の宮坂差し出しの書簡によって確認できる。従って、そうした教師たちから相談を持ちかけられた小原が、開催にあたって力を貸したということが想像されるが、詳らかなことは現在のところ不明である。今後継続して調査したい。

田原と石井の出会いは、この昭和8年の長野彫塑講習会であるようだ。この講習会は昭和11年より上田彫塑講習会に合流する。この際、田原も上田彫塑研究会の会員となり、以後も上田にて石井の講習への参加を続ける。

長野絵画講習会は、昭和12年に「長野市図画担任及び有志教員によって」組織された長野市図画研究会による絵画講習会である。本会の講師として石井が迎えられた背景には、当時鍋屋田小学校の校長であった長坂利郎の関与があったようだ[7]。長坂は、上田彫塑講習会が発足した大正13年当時、会場となった上田尋常高等小学校南校の部長職にあり、同僚であった小林三郎に協力し、講習会を立ち上げた人物であった。長坂は、芸術に造詣が深く、講習会での関わりから石井に私淑していた[8]。長野市図画研究会による絵画講習会は、昭和18年の開催を最後としている。昭和21年、田原は本会を引き継ぎ、長野美術研究会と改め、自ら会長となり、石井を講師とした絵画講習会を再開している。

田原から石井に当てられた書簡の約半数は、本絵画講習会に関わるものである。それらのうち最も日付の古いものは仮番号[馬場51-230]の付されたものである。この書簡では、絵画講習会の開催について連絡し、来信しての指導を仰ぎたい旨が綴られている。そこには会期や参加人数のほか、講習科目として「人物および石膏像の写生(写生材料は任意)/美術講話」と記されており、本講習会の様子を伺うことができる。また、本講習会が教育職員免許法認定講習として登録されており、そちらの受講者が1名あったということもわかる。同様に[書2-115]、[書10-444]等も、講習会の開催と、講師としての来信を依頼するものである。

仮番号[書5-56]および[馬場53-251]は、長野美術研究会によって開催された展覧会に関わる連絡状である。これらの展覧会では、会員の作品とともに、石井が長野の講習会にて描いた素描や絵画を展示した。そのため、それぞれの書簡には、展示予定の石井作品のリストが付されており、これによって、それぞれの年度の講習会の、開催会場、モチーフなどを伺うことができる。

５．版画による年賀状について　田原幸三と版画教育

既述の通り、田原を差出人とする書簡の内、仮番号[書4-509][書4-512][書4-513][書4-514][書4-515][書4-516][書6-388][書10-449]の8通は、田原による自作、自刻、自刷版画による年賀状である。

田原は、『信濃教育』827号に「私の版画教育」[9]と題した文章を寄せている。また、昭和50年12月8日と11日付の『信濃毎日新聞(夕刊)』には、「日本近代版画と信州」[10]という田原のコラムが上下にわけて掲載されている。これらの記事によると、田原が入学した当初の師範学校では版画教授は行われていなかったが、在学中の昭和4年9月に手工科教諭として赴任した石田岩男により版画教育が行われるようになる。岩田は昭和5年に信濃教育会によって組織された手工教授調査の委員長を務め、その調査報告を『信濃教育』537号にて行っている[11]。この中で手工科の指導教材として版画を取り入れることを提起するなど、初等学校教育に版画を取り入れることを主張した初期の人物である。石田から版画を学んだ田原は、赴任先の野沢小学校でも積極的に版画

教育を行なった。この田原の例は小学校における版画教育実践の初期の例となると考えられる。
　また、田原は、昭和9年、須坂で開催された創作版画家平塚運一(1895-1997)による版画講習会に参加している。この講習会は、当時須坂在住の版画家小林朝治(袈裟治)(1898-1939)によって開催された。眼科医であった小林は須坂小学校の嘱託医となっており、教師たちと交流があったことから、多くの教師が平塚の講習会に参加したようである。本講習会を契機に「信濃創作版画協会(昭和8年に「信濃創作版画研究会」として発足、翌昭和9年改称)」が立ち上げられ、版画同人誌『櫟』が創刊される。『櫟』は昭和14年の小林の死とともに発行が止まるが、戦後昭和26年に復刊している。
　田原は信濃創作版画協会会員となり、『櫟』の第1集から作品を発表している。さらに、昭和11年には第11回国画会展に木版画《万座温泉プール》、翌第12回展に《入浴》を出品し、入選している。すなわち、田原自身、昭和初期から活躍した創作版画家の1人であり、かつ、かなり初期から小学校における版画教育に意識的かつ意欲的に取り組んだ人物であることがわかる。戦後も多くの作品を発表し、先の復刊した『櫟』にも関わっている。田原から石井への版画年賀状は、講習会にて教えを受ける絵画の師であり、また、昭和19年より日本版画協会会長を務めた一流の版画家である石井に対して差し出されたものなのである。田原は「私の版画教育」の中で、もともと小学校の科目としては手工科に分類され、それゆえ実用的、作業的活動とみなしがちであった版画について、当初より、明確に美術教育であると考え実施していたとしている。こうした態度や思想は、信濃創作版画協会での活動とともに、石井からの影響も大きいと考えられる。

６．おわりに

　田原は、長野県内における戦前の様々な美術教師たちの講習会に受講者として参加し、戦後は、それらを自らが中心となって再興していった。また、長野師範学校、信州大学の教員として美術教師を志す学生の指導にあたるようになってからは、自身の学生に積極的に、長野や上田で開催される石井の講習会への参加をすすめた。田原のこうした動きは、大正期、様々な新興芸術とも関わりながら紡がれていった長野の美術教育者たちの思想を、戦中を跨いで、戦後へと繋げていったものと考えられる。このような田原の芸術(教育)思想に大きな影響を与えたものが石井への私淑であり、石井の芸術思想であったということが、今回公開する資料を読み解くなかで明確となった。

【謝辞】
　本調査にあたり、ひとミュージアム上野誠版画館館長、田島隆氏より貴重なご助言を賜った。また、田原幸三氏のご息女、森山慈子氏には、本書簡の公開についてご承諾いただき、また、貴重な資料を閲覧させていただく機会を賜った。ここに記して、謝意を表させて頂きます。
　本研究はJSPS科研費17K17780の助成を受けたものです。

1　田原の経歴については田原幸三作品集刊行会『田原幸三作品集』田原幸三作品集刊行会、1989を参考とした。

2　文部大臣官房文書課編『大日本帝国文部省年報第六十年報自昭和七年四月至昭和八年三月上巻』文部大臣官房文書課、1937、p.541

3　文部大臣官房文書課編『大日本帝国文部省年報第六十二年報自昭和九年四月至昭和十年三月上巻』文部大臣官房文書課、1938、p.527

4　昭和22年、学校教育法が公布・施行されたことで師範教育令が廃止され、師範学校は存立の法的根拠を失う。長野県師範学校は予科昭和22年度、本科昭和23年度の入学者を最後に募集停止となり、それらの学生の卒業の昭和26年まで、信州大学に包括され存続した。

5　小原福治『教育随想』信濃教育会出版部、1981、pp.162-163。

6　小原福治『教育随想』信濃教育会出版部、1981、p.163。

7　「美術研究団体」『信濃教育』827号、p.120。

8　大島賢一「信州大学所蔵石井鶴三関連資料信書差出人に見る長野県教育関係者人脈【報告】」『信州大学附属図書館研究』第5号、2016、pp.21-22。

9　田原幸三「私の版画教育」『信濃教育』第827号(昭和30年11月号)、1955、pp.139-144。

10　田原幸三「日本近代版画と信州(上)」『信濃毎日新聞(夕刊)』昭和50年12月8日、「日本近代版画と信州(下)」『信濃毎日新聞(夕刊)』昭和50年12月11日。

11　調査委員会「手工教授細目に就て」『信濃教育』537号(昭和6年7月号)、1931、pp.78-89。

参考文献

- 小原福治『教育随想』信濃教育会出版部、1981
- 田原幸三「私の版画教育」『信濃教育』第827号(昭和30年11月号)、1955、pp.139-144。
- 田原幸三「日本近代版画と信州(上)」『信濃毎日新聞(夕刊)』昭和50年12月8日
- 田原幸三「日本近代版画と信州(下)」『信濃毎日新聞(夕刊)』昭和50年12月11日
- 田原幸三作品集刊行会『田原幸三作品集』田原幸三作品集刊行会、1989
- 調査委員会「手工教授細目に就て」『信濃教育』537号(昭和6年7月号)、1931、pp.78-89。
- 「美術研究団体」『信濃教育』827号(昭和30年11月号)、p.119-122。